

■研究調査レビュー

エッセイ：ぎをゆな考
石川 英昭（鹿児島大学法文学部）

現在大学にて「ディベート論」という授業を担当している。この授業は学生に実際にディベートを行わせるのではなく、ディベート或いは交渉の技術について講義をするというものである。

この授業を担当してずっと気にかかっている鹿児島の言葉がある。広く知られている「ぎをゆな」という言葉である。漢字を当てて表記すれば「議を言うな」であろう。さて、これはいかなる意味を持つ言葉であるのか。

鹿児島に来た当初は、「あれこれ屁理屈を並べるな」「余計なことは言うな」「異議を唱えるな」「口答えるな」「言い訳するな」といった意味で理解していた。子供が親や学校の先生から、女性が男性から、いわば口封じの為に使われる言い回しとして理解するならば、これは「ディベート」とっては天敵となる。そして、この「問答無用」という理解は、自分の経験からも、あながち間違いではないと思っていた。

ところが、この言葉を先の授業の枕詞に使おうとして、いろいろ調べてみると、必ずしもそういう意味でもないらしいことに気づいた。ともあれ最近の例を見ても、何しろ、平成17年度の鹿大の入学式告示（平成17年4月7日）において、「鹿児島には「議を言うな」という言葉があります。これは、議論するなということではなく正しい議論を大いにしなさいという意味だと理解しております。」という見解が示されている。この「議論の勧め」的理解は個人的見解なのだろうか。どうもそうでもないようである。

例えば、熊日フォーラム「熊本への提言」三十人委員会の第四回座談会で、熊本経済同

友会の亀井創太郎氏は、「まず県民性が違う。

「肥後の議論倒れ」に対し、鹿児島は「議を言うな」。決まったことはやるという行動型で、今はこの考え方が求められている。」と発言されている。同じ意味で、艸舎ニュースコラムで鹿児島県青年会館の黒木正彦氏は、「真意は、みんなで話し合って合意決定した後で文句を言ったり、不平不満を言ったとき、すかさず「議を言うな」と一喝された。衆議決定したことは直ちに実行だと厳しく教えていた。いわゆる即断即決の行動様式である。」と説かれている。

福永法弘氏は、「薩摩では、事を起こす前に全員が積極的に議論に参加し、多数決などの形で一つのことが決まったら、それから以後は、ああだこうだと文句を言わずに最善を尽くすのが伝統であり、「議を言うな」の前提には「議を尽くした」ということがあるのだ」との説明を受けた経験を述べている。

そうであれば、入学式告示の「議論の勧め」的理解も、亀井氏や黒木氏の理解と同じ系列に連なろう。

ところが、福永氏の経験にはまだ先がある。奄美において、「議を言うな」をこの「議論の勧め」的意味で使ったら、「奄美においては、薩摩藩の理不尽な圧政に対する島人の抗議を、藩庁の役人が門前払いする「問答無用」と同義だというのである。奄美統治に関して、薩摩藩が奄美の人々と議論を尽くしたりするはずがないではないか。それが奄美の人たちの言い分だった。」ということである。

そこで私は考えた。「議を言うな」をめぐるこのまるっきり対立すると思われる二つの理解は、本当に対立するのだろうかということ

をである。多分、「議を言うな」の前提には「議を尽くした」ということがあるのだろう。しかし、ここに隠された問題がある。一体、誰が「議を尽くした」のであろうか。親や先生や上司や男、そして鹿児島人は、或る問題に対して、十分議を尽くしたつもりであろう。いや、彼らは本当に「議を尽くしている」のかも知れない。しかし、子や生徒や下っ端や女性、そして奄美人は、多分そもそも議論に参加できていない。「議を尽くす」場に参加させられず、全ては決まったこととして「議を言うな」と言われる。「議を尽くす」時に、「あなた等のこともちゃんと考えているよ」と言うのであろうか。しかし、「議を尽くす」場に参加できない子や生徒や下っ端や女性、そして奄美人にとっては、「議を言うな」とは、やはり「あれこれ屁理屈を並べるな」「余計なことは言うな」「異議を唱えるな」「口答えするな」と言われているのに等しい。こう考えれば、「議を言うな」についての先の二つの理解は、コインの両面と受け取ることも出来よう。諸賢においては、如何考えられるだろうか。

最近の世の中を見るに、さて誰が議論に参加できているのだろうか、と気になることが多い。

参考引用

http://kumanichi.com/tokushu/ku_forum/forum04/forum04.html

<http://www.sosya.or.jp/s-news/sn1.htm>

<http://ishido-an.hp.infoseek.co.jp/frame-kuhyoessay1.html>